

立高での3年間は人生の中で最もファンタスティックでした

同愛記念病院 整形外科
日本相撲協会診療所
日本ハムファイターズチームドクター

中川 照彦氏（高校24期）



1972年 立川高校卒業
1979年 東京医科歯科大学医学部卒業、同大学整形外科学教室に入局
1996年 同愛記念病院赴任、2007年 整形外科部長、2017年 副院長、
2022年副院長を退任し、現在非常勤医
2012年 第39回日本肩関節学会学術集会会長

■立高時代

立高に入ってびっくりしたのは、その自由な校風でした。中学時代はガチガチの校則に縛られていました。私服はオッケーだし、学食もあって、部室もあって、夢のようでした。僕は茶道部に入りました。畳の部室があって、ごろごろできるし、部費で美味しい和菓子を買えるし、もう最高でした。喫茶店でだべったり、近くの映画館で映画をみたり。そして同学年のガールフレンドができたことも超ラッキーでした。デートはできるし、待ち合わせていっしょに通学。立高祭では教室にお茶室を造り、土や石を運んでお庭も作成し、羽織袴を身にまとい、お手前を披露しました。キャンプファイヤーも忘れられないイベントでした。勉強のほうですが、伝説の教師である小山先生の数学には度肝を抜かれました。最初のテストは15点くらいだったと思います。



大学学園祭でのライブステージ

■卒業後

父が医者だったので、僕も医学部を目指しました。駿台予備校の4回目の受験で最上位のクラスに入学でき、浪人中はめっちゃくちゃ勉強をしました。そして東京医科歯科大学医学部に受かったときには本当に嬉しかったです。大学では弓道部に入り、合宿と試合に明け暮れ、弓道三段をゲットしました。立高の同級生とロックバンドを組み、中学から始めていたエレキギターの腕も上達し、大学の学園祭ではフィナーレを飾るライブコンサートでトリを務めました。

卒業後は父と同じ整形外科医となり、マイクロサージェリーの技術を修得して、切断指の再接着などを行っていましたが、

しだいに肩関節外科にのめり込んでいきました。特に肩の鏡視下手術では手術手技書を2冊書きました。同愛記念病院に赴任してから日本ハムファイターズのチームドクターになり多くのプロ野球選手の治療やケアにあたっています。また病院が両国国技館の近くにあり、大相撲力士の治療も積極的に行っています。スポーツ整形外科もライフワークの1つになりました。

■立高生へのメッセージ

世界と渡り合うには英語が必須です。とにかく英語力を身につけてください。最近入局してくる新人の医師は隔世の感があるくらい皆英語が上手です。特に女医さんはネイティブかと思わせるほど発音が完璧です。今はPCやスマホで生の英語を聞けるし、最近ではAIで英会話レッスンができるようなので、是非ともリスニングとスピーキングにみがきをかけてください。僕は国際学会のさい、英語でとても苦労しました。英語で外国人とバチバチのディスカッションができるようにならないと辛いです。



2011年 渡米前のダルビッシュ投手



2017年 渡米前の大谷翔平選手